

長崎の濱崎太平次

石田 孝

幕末・維新期に銅座の川沿いに四棟の土蔵と店舗・住居計八棟のヤマキ長崎店があった。ヤマキは屋号を山田屋といい、西は出島、南は唐人屋敷へそれぞれ二五〇メートル、前の銅座川を隔てて新地があり、背後には薩摩藩蔵屋敷が隣接していた。店の所有者は八代の濱崎太平次で江戸時代後期の長者番付では常に上段に位置していた。私の故郷、指宿と鹿児島に本店・琉球・大坂・新潟・函館に支店を置き、千石船を含む三十数隻で回漕・貿易業を営み、薩摩藩家老調所広郷の財政改革を縁の下で支えたのみならず、三隻の船を同時に造ることが出来る約二千坪強の造船所を薩摩湊浦に設けていた。そこは錦江湾に臨む湯の里指宿の中心にあり、今は太平次公園と称され太平次の銅像が立っている。彼の勲功は古老達に語り継がれている。又、彼の伝記は浜崎太平次翁顕彰会発



指宿にある濱崎太平次像

たかの如きイメージである。

鹿児島県役人の越智通遠「崎陽日誌」の謄写本が長崎歴史文化博物館にある。明治六年四月一日から六ヶ月間ほどの内容である。この日記には十代目太平次とヤマキ四天王といわれた大番頭二人中村八左衛門と高崎寛兵衛が度々登場する。幾つか拾ってみると、「九月七日 諏訪社御祭礼二付いちち源左衛門殿拙者高崎父子その外社中人數濱崎太平次同道諏訪に参詣鳥井前にて拝礼神社三座大粧賑々敷帰玉川に立寄いつ迄も大酔日入銘々引取いちち氏濱崎太平次高崎徳兵衛服部誠之助小澤泰助同道大小屋差越酒宴夫より鹿鳴や立寄候処、大粧し客人有之拙者座敷に永見と見舞有之今夜一時帰宿」とは、長崎くんちで諏訪神社参拝の後の様子である。玉川は玉川亭、高崎徳兵衛は寛兵衛の息子、服部は現ダイエー銅座店にあった薩摩藩御用達商人で、この年六月薩摩藩蔵屋敷約半分を千円で入札払い下げられた。大小屋・鹿鳴やは丸山にあり「弥太郎日記」にもよく登場する。永見は薩摩藩五代友厚とも親交のあった永見伝三郎だろうか。もうひとつ、「九月十一日今日於高崎書繪會相企當時名高池原奎兄弟是書家也陸舟。龍図此式人鉄翁門人面者夕刻銘々入来有之書方有之快哉療額字並詩書池原奎書調山水掛物用画並陸陸舟に相願候立派に出來伊地知氏も同断夫より酒宴と相成鳴鳴坂家」により番頭高崎が主催した書画会の華やかな様子が分かる。池原兄弟とは香釋と兄の枳園であり、鉄舟は中村鉄舟である。

『薩摩海軍史』の松方正義侯直話には、薩摩藩が蒸気艦船「春日丸」購入に際して、ヤマキより資金を融通してもらい、グラバー商会のヒューズとの交渉にあたった中村・高崎両番頭の功績が褒め称えられている。

また南北戦争勃発により南部綿花地帯が戦場と化したことから、いち早く国内の繰綿を買い占めグラバーと好取引したが、文久三年大阪から長崎へ向かう途中、下関沖で長州藩から砲撃され火災沈没した長崎丸には、九代太平次と繰綿が乗っていたことからハイリスクハイリターンの世界に生きていたことが分かる。我が国の紡績業の礎を築いたことや小菅のそろばんドック建設の幕府への申請も番頭名でなされたことなど枚挙に暇がなく、また三菱と並ぶ川崎重工業の創始者川崎正蔵がこのヤマキ長崎店で十七才から十年間店員として働き、太平次の薫陶を受けていた。

(和紙作家・長崎ユネスコ協会元事務局長)

刊の『海上王濱崎太平次傳』や『鹿児島県史料』の他には、ほとんど残されていないし、直系の子孫も絶えていることは残念である。

太平次は文久三年(一八六三)大坂で五十才のとき病に倒れ死去している。この時、彼の病床に孝明天皇が侍医を遣わされたことからその偉業が偲ばれる。今年は没後百五十年、来年は生誕二百年にあたる。指宿では文化庁補助金事業「指宿まるごと博物館」構想の一環として、指宿ムービープロジェクト『太平次・旅立ち』の映画作りが進み、数分間ではあるが、長崎の今昔も挿入されるそうである。現在編集段階だが、ナレーターには元NHKアナウンサー松平定知さんが担当され、今春には完成予定であると聞いている。

長崎の太平次について、まずヤマキ長崎店の確認は、鹿児島県図書館ウェブサイトの貴重資料の紹介『薩摩の豪商、浜崎太平次』のタイトル『長崎旧薩摩屋敷及浜崎太平次倉庫並住宅図』で見ることができる。

年代不詳の図ではあるが、旧薩摩藩蔵屋敷跡には三井銀行・株式取引所・支那料理店と記されていることから、大正九年から昭和九年にかけての作図であることが分かり、銅座川沿いの敷地約三百六十坪が当時は和華蘭交易の一等地を占めていたと言える。また薩摩蔵屋敷とヤマキ跡の間約二百八十坪の敷地にはヤマキの屋号と栗岡商店倉庫と記され「島津隨身屋敷」の注がついている。『斉彬公史料四』に「長崎御屋敷御隣屋敷差上度訴出候書巻通」があることから太平次が蔵屋敷は薩摩藩に献上したものであろう。

幸いにして長崎大学附属図書館には「幕末・明治期日本古写真コレクション」があり、先述の図を元にこのコレクションを探っていくと近遠景の銅座・西濱町が新地蔵と共に写されているのに出会う。(インターネットで閲覧可)中でも明治七年頃上野彦馬撮影の「大徳寺跡から県庁方面を望む」(No.六〇五四)はヤマキ長崎店の白壁の土蔵をハイライトにし

風信

〇二月と言えば先ず節分であり、二月三日が今年の節分である。四日からは春となる。そして旧正月の元旦は二月十日である。其の故に旧正月元旦前に春を迎える事になる。

古歌に、
年の内に春はきにけり この年を去年とやいはん 今年とや言はん とある。

〇節分の行事の事に就いては吾妻鑑に「節分の夜は方違として他家に宿泊する行事や、鯛の頭を門戸にさす」とあり、室町時代の文献には中国の暦法・追儺の行事により「豆を打ち鬼を攘う法」を伝え今に至ると記してある。

〇長崎関係で節分を記した最古の資料としては、長崎イエズス会一六〇二年編纂の「日ボ辞書」(邦訳)があり次のように記してある。Xebun(正しくはXechibun)異教徒がVonは外に出て行き、宝と幸福の神が来るようにと大声で叫びながら、煎ったMames(豆)を家の内に投げて悪魔を追い出す年の末。NayaraiまたはVonyaraiとも言う。

〇江戸時代の長崎の節分資料としては、寛政九年(一七九四)長崎の人野口文龍が著した『長崎歳時記』(長崎県史・史料編四)と其の後饒田諭義が編した『長崎名勝圖絵』があり次のように記してある。

節分の夜は鱈を作り、神棚・浴室便所に至るまで燈火をかぐ、夜に入り燈火を全て消し、年男を立て家内より外に出て庭にまで豆をまき鬼を追い佛う、後ち家内にて祝宴。赤大根を鱈に入る、又は輪切りにし塩をもち食す。此の日暮頃、使用すみの火吹竹の口に紙をつめ外に投げる。此の時あとを見る不可。この時刻、山伏等厄祓とて貝を吹き鈴をふり廻る。家人、小包銭を与え祓をなす。又この頃、街の遊人・面をつけ三味線太鼓の囃子をつけて廻り祝詞をうたう。又大根にて鼠を作り台に盛塩と共にのせ、明の方より満汐にて来ました」と祝詞を言い銭を乞ふ子供達もいた。其の夜は諏訪社にて「豆はやし」・鬼火たきあり。昔の節分の夜は大いに賑わったようである。又、幕末の頃の長崎節分料理には尺八鳥賊と金頭(魚)の御煮付が縁起物として出されていた。

〇長崎歴史文化観光検定 第八回。長崎検定は京都・東京検定に次ぐ三天観光検定として全国的に有名で、二級合格は仲々むつかしいとの由。中でも長崎では多くの高校生の受験合格が評判になっている。今年は長崎市職員や学校の先生方も多く受験されているとの事。全員の合格を祈りおきます。

〇三月四日より本会の月・火・水・金の各講座を開講します。御自由に御参加下さい。(会費不要) 連絡は事務局まで(電話八二二一―一五四〇)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL八二二一―一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

